



今年(2022年)で、津軽保健生活協同組合は創立70年を迎えます。津軽保健生協は、1952年9月、当時の、お金がなくて、亡くなる時にしか医者に診てもらえない津軽の人たちの状況を強く憂いた創設者津川武一医師が、「医療を民衆の手に」をスローガンに掲げ、組合員800名の力を支えに開設されました。そして、現在では、津軽一円に5万6千人あまりの組合員を擁する医療福祉生協に発展しました。

2020年から始まった新型コロナウイルス感染の世界的な流行の中で、青森県でも多くの患者が発生しました。健生病院は、弘前大学医学部附属病院、国立病院機構弘前病院、弘前市立病院と協力して診療にあたり、2021年4月から9月までの半年間に140名の入院患者を受け入れました。各診療所も発熱外来を開設し、地域医療を支えるために奮闘しました。

日本精神病協会は、2021年9月15日、精神病院に入院中に新型コロナウイルス感染が確認され、転院を要請してもできず死亡した患者さんが全国で235名に上るとの調査結果を発表しました。新型コロナウイルスに感染した精神疾患患者に対する対応が全国的に問題となる中で、県からの要請を受け、2021年12月、藤代健生病院は新型コロナウイルス患者の入院受け入れが可能な病棟を整備しました。

2020年4月、健生病院は、国民健康保険料滞納者に発行される資格証明書を所持している患者が、病院を受診しにくくならないよう市に申し入れました。資格証明書を所持していると、病院を受診する場合、医療費をいったん全額支払わなければなりません。そのために、新型コロナウイルス感染症が疑われる患者の受診が遅れて重症化する、あるいは診断が遅れて周囲に感染を拡大させることを危惧しての対応でした。

このように地域にとってかけがえのない存在である津軽保健生協の事業を守り更に発展させるために、これからも、職員一同、努力する所存でございます。

組合員の皆様には、改めて、一層のご支援をお願い申し上げます。